

領民守った八王子城解説

八王子市在住の中世城郭研究家、中田正光さん(67)が、「戦国の城は民衆の危機を救った」(揺籃社)⇨写真⇨を出版した。領主は税を取る代わりに領民の安全や農耕を保障する責任を負っていたという観点から、同市



城郭研究家・中田さん出版

などに存在した城が担った公共的な役割を分析している。

戦国時代、合戦があると領主の城が領民の避難場所になっていたことが、従来の研究で知られている。中田さんは本書で、八王子城では領民を守るため、北浅川と南浅川を延長10キロを超す長大な堀と見立て、町ごと囲う「惣構そうがまえ」が築かれていたと論じた。また、八王子城や勝沼城(青梅市)などに築かれた池や堤防を例に、城には領民の農

耕を保障するための役割があったと再評価している。

中田さんは戦国時代の城について多数の著作を発表してきた。本書の構想は、戦乱に翻弄されつつも、たくましく生き抜く民衆を描き出す藤木久志・立教大名誉教授の研究に刺激を受けて生まれた。「これまでは領主の視点で研究してきたが、民衆の視点から再考すると多摩の城も違って見えてくる」という。出版はNPO法人「滝山城跡群・自然と歴史を守る会」が企画した。四六判208ページ、1500円(税別)。